

第 2 回「福井の教育」向上会議 議事概要

- 1 日 時：平成 27 年 1 月 22 日（木）13：30～15：30
- 2 場 所：福井県庁 7 階 特別会議室
- 3 出席者：下谷座長、秋田委員（スカイプ）、石川委員、津田委員、徳本委員、禿委員、永瀬委員、長谷委員、羽田野委員、松木委員
福井県教育委員会：吉井委員長、西野委員、林教育長

4 結果まとめ

(1) 協 議

① 学校教育等（幼児教育、小・中・高校教育）の向上について

◆ 意見交換

<永瀬委員>

- ・中央教育審議会でも高大接続を議論しているのは、学力の高い生徒が本当に社会で活躍しているのか、というところにある。
- ・学力があることが必要条件になる職業もあるが、活躍するためにはリーダーシップなど人間力/を兼ね備えないといけない。
- ・今までの受験は受け身型の学力を唯一の選抜方法としていたが、一方で大学に入って何を学びたいか、世の中で何を成し遂げたいかという志といったものを持つ方が大きく伸びるのではないか、ということ。
- ・ハーバードなどでも、学力も見るが、やはりこの大学で何をしたいかという志の観点が大きい。大人になって国、ふるさとに対してどれだけの貢献をするような人材を生み出すか、そのためにはどういう選抜方法をするかということがポイントである。
- ・もともと、大学入学時点でそのような能力を評価できるかどうかは分からないし、学力だけで判断する方がいいという意見があることも事実である。

<松木委員>

- ・人間力と知識中心の学力が別物かどうか。今、求められている学力のあり方とは、具体的な知をつくりかえる活動であり、現在の小・中学校の学習にも入れ込むことができると思う。
- ・我々の大学でも大教室で知識伝達型の授業を行っているが、これから必要なのは地域の中で活動しながら課題を見つけて解決する学習活動であり、知識と人間力を合わせた授業を小・中・高校から大学まで準備が必要だと思う。

<下谷座長>

- ・今までの教育では人間力は育てられないという反省があったのか。

<永瀬委員>

- ・今までの教育で、世界で大活躍している人間をどれだけ生み出したのか。学力を重視することは当然だが、そのための努力の原動力になるのは自分の夢や志である。
- ・なぜ勉強するのか、どう生きていくのか、といったことまで踏み込んだことを考える必要がある。学校の中だけでなく、友人とのコミュニケーションの中で見つかることもある。同年齢の集団の中で触れ合うことで自分なりの考えを持つことができるのではないか。もう少し、考える時間と場を与えてはどうか。

<下谷座長>

- ・学力成績を上げるための努力に価値があるという考えもあるが、それと切り離れたところで人間力、他人との協調や志を考える必要があるのか。

<長谷委員>

- ・現状の営みが歪められているのは絵的思考がないからである。人間のバックグラウンドには絵的な思考があり、よみがえらせる必要がある。
- ・文書でも数式でも絵が浮かび上がることが正常なはずだが、今の子ども達にはそれが欠けている。右脳左脳という話ではなく、幼児や低学年の児童は絵的な思考を得るために活動しているのであり、根底を見直す必要がある。
- ・バックグラウンドをどうつくるかということ。大人は見る感覚でリアリティのある絵を描くが、子どもの絵は五感で感じたままに描いている。大人とは全く違う独自の世界観があり、それを計画の中にも入れると深みが出るのではないか。大人と同じように考えないようにすることが必要である。

<秋田委員>

- ・東京大学では推薦入試を変えることとしており、一つのことを究めて表現できる力を重視している。
- ・基本的な知識やスキルの習得は大事だが、それを通して自分のものにして表現できる力がとても大事である。それが人間力、他者に対して自分の持つものを表現しながら知をつくるという、これから求められるものになるのではないか。
- ・中央教育審議会というアクティブ・ラーニングの議論にもつながることである。福井でも、さらに能動的に生徒が参加できるような授業体系を幼児期の遊びから小中高とどう作っていくのかを議論すればいいのではないか。

<松木委員>

- ・福井では、18歳になると3千人が外に出ていくが、1千人しか戻ってこない。福井に帰属や愛着を持てるように福井のことを学習するのも大事だが、福井を学ぶだけでなく、これからは福井をつくり出す学習活動をするのが重要ではないか。
- ・地域に出かけて行って総合的な学習を展開するなど意味がある。かなりいろいろなことができるし、大学入試でもそれを測ることができるのではないか。

<長谷委員>

- ・イタリアのレッチョ・エミリアの幼児教育では、総合的学習の時間にいろいろなところに行き行って調べたりしたことを全て絵で表現しており、注目されている。
- ・芸術指導員と教育指導員の双方がいる。絵的思考は全体をみて、次に部分をみて、関係性をみる方法であり、人間力をつくる根幹である。

<永瀬委員>

- ・福井の先生は丁寧で熱心であるが、生徒がいろいろなことに立ち向かう力を持っているか。予習の状況などを見ると、自ら求めて頑張っているとは考えにくい。
- ・どこまで手をかけて、どこまで自分自身に任せるか、あえて失敗させて自分自身で学ばせることも必要ではないか。絵的思考というのはマクロで捉えるということであり、先生と生徒の接触の方法を考える機会だと思う。

<石川委員>

- ・小学校の子どももスポーツ少年団などでかなり忙しい。中学校になると部活動で帰りが21時頃になることもあり、疲れてすぐに眠ってしまう。
- ・予習や復習はできていないが、学校の授業と宿題で充分やってもらっているのも、それだけでも一定の成績が取れるのではないか。これからは、どう自分で意欲的に物事を捉えていくかを考えていく必要がある。今は与えられたものだけでやっている。学校の中で、授業の中で、うまく吸収しているのだと思う。

<津田委員>

- ・2歳児から自由に身体を動かすことで表現を覚えている。18年教育の中で、繰り返し学力面でも繰り返して覚えていくことで人間力もつくのではないか。
- ・自分の力で書く、動いていくことをどう覚えていくか。絵もそうだが、身体で表現することも大事である。学校で教えたことを使って動くことが大切である。

<長谷委員>

- ・子どもにとって一番大切なのは感じることであり、足踏み一つとっても大切な刺激である。絵的思考は数字や文字による思考を否定するものではなく、その根底となる。

<徳本委員>

- ・幼児教育では親の力が大きい。親子教室などでも子どもに雑な対応をしている親に対しては、手取り足取り教える部分も必要である。

<松木委員>

- ・今は、力を引き出す授業ではなく、知識を教える授業になっている。これからは、答えのない問いに対応することが重要であり、教員自身も学び続ける姿勢が重要であり、教員がどのような力を身に付ける必要があるかを考える必要がある。
- ・50代の教員が大勢おり、管理職在職期間が短いため、新しいことを始めにくい。管理職試験のあり方も含め、改革志向のある管理職を養成する方法を検討する必要があるのではないかと。

<津田委員>

- ・親を育てるのが先か、保育士等を育てるのが先かという議論はある。0歳児から保育園に預ける親もいるので、保育士を育てる重要性は高い。
- ・保育士には子どもを見る目が大切である。つぶやきに対して子どもがどう反応するかを見る目もあるし、いろいろな遊びを経験させるよう目を配ることもある。

<羽田野委員>

- ・福井の教育の良さは子ども達の同質性を前提に成り立っているように感じる。
- ・これからグローバルに活躍する人材を育てることを考えると、福井をつくる学習などで付けた力を活かすためにも、多様なバックグラウンド、個性を持つ子ども達をどう取り入れていくかを考える必要がある。
- ・人口減少を前提に考えると、福井を出た人を呼び戻すことだけでなく、送り出すことも大事である。一方で、福井の教育を受けたい人を呼び込む施策を考えてはどうか。

<長谷委員>

- ・日本全体の小型版のように、福井県内でも地域を担う人材が福井市に集中している。
- ・都会が便利なのは確かだが、福井県に戻すことを考えると同時に各地域を担う人を確保するという考え方も取り入れて欲しい。
- ・福祉や就労支援など様々な分野が関係する。教育委員会ですべて入れ込んで総合的な計画とすることはできないか。

<林教育長>

- ・全ての政策が人に関わることであり、切り口がどうしても省庁ごとに分かれる。厚生労

働省や経済産業省も関係する。文部科学省は学校のことを所管しているが、施策を受ける側にとっては縦割りは関係ない話である。

- ・総合化してしまうと、結局は担当ごとに機能を分担せざるを得ない。連携をいかにするか、全ての事業を教員がやるのかどうか。
- ・今までの感覚では、学校は教員だけでやるというもの。チーム学校など複合的組織の感覚は出てきているが、皆が認知していかないといけない。
- ・時間軸でも企業に入ってから育てたことを学校でやる、家庭でやってきたことを学校でやる、ということになると時間的に間に合わない。絵的な思考についても、考える時間が足りないということになり、学校の中でその時間を生み出すことは難しい。

<徳本委員>

- ・ある中学校では毎日 100 件ほど生徒に電話している。家庭訪問も月 20 日間ほどやっているというし、保護者の学校に来ることもある。
- ・教員の確保にも影響するし、多忙のため研修に出られない現状を理解する必要がある。これだけ忙しいところを次の計画でみていかないと、しっかりした子どもとの対話は難しいのではないか。

<永瀬委員>

- ・福井の教育が今のままでいいとは誰も言っていない。これをどう良くするかということだが、熱心すぎる先生が子どもの自立を損なっているのかもしれない。
- ・私の経営する予備校でも試験結果を教員が総括していたが、細かくすると負担が非常に大きかった。これを生徒自身が試験結果を総括するように変えたところ、教員の負担も減ったし、生徒自身が論理的・合理的に考えることにもつながった。
- ・教員が全てやろうとするよりも、本人自身に考える機会を与えることが大切である。自分で求め、考え、実行することを一人ひとりの子どもができるようにすれば、日本でも相当のレベルの教育になるのではないか。
- ・自分自身が成長したいと思っているのは間違いない。その心を評価して、ほめてあげることを続けていけば、たくましい子どもができるのではなか。今は従順でおとなしい生徒になっているのではないか。
- ・場合によっては、そのような教育を受けさせたいということで、他県から人を呼び込むことにもつながる。次は何を目標にするかということ。

<禿委員>

- ・幼稚園からの基本的な考えとしては、小さい時から手を合わせる事。教育とは共に育むことと考えており、一方通行ではなく、相手からも自分が教わる事である。
- ・自分がマスターしたことを違う人に教えていく。お互いの学び合いが大事だと思う。信

頼関係がないところで何を言っても聞いてもらえない。相手の気持ちを思いやり、行動することが大切である。

<下谷座長>

- ・英語教育をいつから始めるか、どのようにすべきかということに意見はあるか。

<長谷委員>

- ・懇切丁寧に教えることやおだてることも必要だし、一方では自分で意欲を持って学ぶ生徒もいる。多様な生徒がいることを念頭に考えることが重要である。

<羽田野委員>

- ・学校は知らず知らずのうちに、こうあらねばならないというメッセージを発信しており、枠にはまり切れない子どもも一緒に入れて集団とするような、多様性を包み込む体制を考えてはどうか。

<徳本委員>

- ・親の気付きが大事である。今はクルマで送り迎えしており、地域の気付きの場と接触する機会が少ない。強制的にでも気付きの場をつくることを考えてはどうか。親の気付きは子どもにも伝わる。

<秋田委員>

- ・これからの福井の教育方針に是非入れてもらいたいのは、誇りを持つ子どもを育てることである。同質性があるため学力が高いという話があったが、それぞれの地域、学校が人と違うことに誇りを持てるようにするといいい。
- ・幼児教育の質を上げようと思えば、小学校の先生に保育をみてもらうなど、異質なところに開きながら学び続けることが大事である。
- ・シンガポールは福井と同様に学力が高いが、次の一步はダイバーシティと考えている。いろいろな子どもがいるが、それぞれに誇りを持たせることで国の力を上げていく。
- ・同質性で学力が高いというところから、異質性を認めて各地域や福井県の中での違い、良さを活かしていくような教育を考えるべきである。
- ・英語教育についても、単に教科化されたからやるというものではなく、なぜ必要かということを見ると国際的な共通語であるから。自分の良さを国際的に表現できる人材を育てるという観点から捉えて欲しい。

<下谷座長>

- ・同質性があるからこそ学力が高いという面はないか。異質性を追求するとそれが維持で

きなくなることはないか。

<秋田委員>

- ・多様性を追求していくと、学力そのものは落ちる可能性がある。ただ、すでに一定水準の学力は確保しており、得点だけを気にする必要はないのではないか。

<津田委員>

- ・異質性をどのように学校現場に持ち込むかが課題である。いろいろな問題を抱えた子ども達もいるし、必ずしも昔ほど従順な子ども達ばかりではない。
- ・教員でも心の病にかかる人が増えて、学校を維持するだけでも大変な状況である。現実的にどのように落とし込むことができるか。

<長谷委員>

- ・保育士は正職員が4割しかいない。正職員以外は研修にも来ないので、そこにしっかり情報を伝える必要がある。
- ・異質への理解と寛容は私の母校の教訓でもあった。

<吉井委員長>

- ・昔は自分で工夫して海や山で遊ぶ機会があったが、今は家に閉じこもっている。

<秋田委員>

- ・異質性を重視した教育にコストがかかるわけではない。多様性とはそれぞれの違いを認めて誇りを持つという根幹の哲学として大事であり、特別支援教育でも国際理解でも同じことだと思う。
- ・特別支援教育では、どの人にも優しく、どの人にもきちんと教える、通常学級も含めたユニバーサルデザインが提唱されている。その中で一人ひとりが多様であることに誇りを持たせるためには、確実に必要なことを身に付けるということ。
- ・異質と多様という概念で分けるのではなく、これまでを活かしながらも、さらに今後の方向として何を大事にするかということである。

<林教育長>

- ・伸びるものを伸ばす、ということ意識しているが、個々の児童生徒の時期の問題がある。同質性をつくり出す義務教育の部分、福井はそこが評価されていると思う。
- ・一部、早い時期から異彩を放つ人もいるが、ほとんどは高校・大学に行ってから自分の生き方を考えることになる。徐々に育っていく生徒が大半ではないか。
- ・小学校から特別な才能を伸ばす教育をすとしても、パイが大きい都会ならともかく、

福井では学校・クラスが組織できないので、一人ひとりに教員を付けるのかという話になる。

- ・35人学級で全員に違うことを教えることは不可能であり、現実的に、どういう時期に、どういう教育をすることで能力を引き出すことができるのか。同質性を捨てるわけにはいかない。
- ・子ども達の限られた時間、限られた人員の中でどのようなことができるか。ICTを活用した遠隔授業なども一つの方法だと思う。時期・方法論が明確ではないので伺いたい。

<長谷委員>

- ・ハード面で少し工夫してはどうか。宮崎の五ヶ瀬では山の中で一貫教育を行っている。全寮制の小学校や嶺南に中高一貫教育校を建てるなど、福井中心ではなく、目先を変えて思い切ったことをやってはどうか。ある程度の集団教育は必要である。

<林教育長>

- ・併設型中高一貫教育校は、同質性に意味がある。ばらばらの状態だと効果は出ない。
- ・同質の中で異質なものを受け止めるということと、自分自身が異質なものを育てるといふ観点がある。他を理解することは、今の教育の中で充分できると思うが、個々を伸ばす教育が福井の小さいパイの中で行えるかどうか。

<永瀬委員>

- ・どういう層をどう伸ばしたいのか。上の生徒をどこまで伸ばしたいかということ。
- ・今まで東大に入っていた学生が海外の大学に進学する傾向も強まっている。留学生の数が半減したというが、逆にトップ層の海外進学は増えている。
- ・我々はハーバード大進学者に2,000万円を給付している。県でも、何人かでも将来の福井県を引っ張る人材を育てることが重要であり、多くの県民に幸せをもたらすのではないかな。惜しみなく資金をつぎ込めばいい。

<津田委員>

- ・子ども一人ひとりの特長を認められるように自由保育の中身を変えれば、低学年の総合学習の時間も変わる。皆が同じ学習をする必要はない。そこを改革すれば社会や理科の教科学習においても総合学習の成果を活かすような授業にできるのではないかな。
- ・福井では、地域の人を入れて総合学習で学んでいる。幼児教育からつながるようにすることもできるのではないかな。

<西野教育委員>

- ・自分は他県出身だが、福井の教員がまじめに研究熱心に、均等に勉強させることを続け

- ていることが高い学力につながっていると感じており、決して悪いことではないと思う。
- ・次のステップに進むには先輩がいるわけではない。他県でも尖った子を集めた学校などを模索しているが、福井は実直に同じ教育方針を続けている。
 - ・学力に新しいプラスアルファを加えることはやるべきだと思うし、素晴らしいことだと思う。すぐに答えは出ないが、質のいい放任など、結果が出ない時期があっても余裕を持つことが大事ではないか。

<長谷委員>

- ・今の福井の教育で改革される大学入試に対応できるかどうか。そこが問題だと思う。
- ・出口が変われば現場は変わらざるを得ない。

<永瀬委員>

- ・選抜方法が2種類できると思った方がいい。1割から2割はA0入試のような形で、8割は一般入試になりそうである。

<下谷座長>

- ・中央教育審議会などの議論を受けて福井がどうするか、ということが問題だが、今までやってきたことにプライドを持ち、間違っていないと確認することも大事である。
- ・もう一つ何か付け加えた方がさらに良くなることを探りたい。次回はできれば角度を変えた議論ができればと思う。

以 上